

デジタル時代の内科学

神経
中 原 仁
(82 回生)



私事で恐縮ですが、小六のころ、父の米国赴任に帯同し渡米しました。時はバブル全盛期、かのロックフェラーセンターまでが日本の手中に収められ、猫の額ほどの社宅で身を寄せ合っていた我が家の暮らしは、駐在員としてまるで王族のような生活に一変しました。他方で、アルファベットすら書けない小生は、突如聾啞の暮らしを余儀なくされ、程無くして「引きこもり」となりました。閉ざされた心を開く契機となったのは、まだ Apple II というモノクロコンピューターが現役であったころに、我が家にやってきた一台の Macintosh でした。思えばあの頃がデジタル時代の始まりだったのかも知れません。

学生時代、第二校舎では、まるで工場の如く日夜を問わずゲノムプロジェクトが続けられていました。そこに整然と並んでいたのは、旧知の友である、あの Macintosh でありました。医学はデジタル時代になる、その覇者は米国である、との直感と追憶に導かれ、体裁は「アメ留」ながらも実際にはジョブミーティングとして最後の夏休みに渡米し、とある医療機関に内々定を得ました。しかし帰国後、相磯貞和先生と池田康夫先生のお導きがあり、慶應義塾大学病院の内科研修医になる道を選ぶこととなりました。

「アメ留」では PDA（スマートフォンの先駆け）に症状を入力すると鑑別診断リストや検査項目が出てくる医療を目の当たりにしていました。ところが、床が軋む暗い 7 号棟で小生を待っていたのは、紙カルテに紙伝票のアナクロな日々でした。そのような「不自由さ」の中においても魂の共鳴を禁じ得なかったのは、患者と共に笑い、家族と共に泣く、オーベン達のまさに汗と涙、ひたむきな後ろ姿でした。研修が終わるころ、底をついた米櫃と裏腹に生涯の宝物として心に沈澱していたのは、デジタルとはほど遠い泥臭い教えでありました。生とはなにか、死とはなにか、病とはなにか、幸せとはなにか、医学とはなにか、そして医師はどうあるべきか、答えのない世界に対峙し続ける「勇敢さ」でありました。

物理学者であった寺田寅彦の随筆「化け物の進化」にこのような一節があります。

—自然界の不思議さは原始人類にとっても、二十世紀の科学者にとっても同じくらいに不思議である。その不思議を昔われらの先祖が化け物へ帰納したのを、今の科学者は分子原子電子へ持って行くだけの事である。昔の人でもおそらく当時彼らの身の辺の石器土器を「見る」と同じ意味で化け物を見たものはあるまい。それと同じようにいかなる科学者でもまだ天秤や試験管を「見る」ように原子や電子を見た人はないのである。—

今日日、アルツハイマー病について問うたならば、アミロイドβの蓄積により神経細胞死が生じる病気との答えが返ってきます。治療はと尋ねれば、アミロイドβを除去することと答えます。デジタル時代の正答なのかも知れません。しかし診察室の風景は少し異なります。物忘れの自覚はないが少し怒りっぽくなった患者さんを、どうにか説得して外来まで連れてきた、困り果てた家族がそこにはいるのです。私たちにはアミロイドβを除去すること以外にも多くのことができるはずで、目の前の患者こそが真実であり、何をなすべきか、今日もまた患者と共に無限級数を追うのです。

寺田寅彦はこうも述べます。

— 化け物がないと思うのはかえってほんとうの迷信である。宇宙は永久に怪異に満ちている。あらゆる科学の書物は百鬼夜行絵巻物である。それをひもといてその怪異に戦慄する心持ちがなくなれば、もう科学は死んでしまうのである。 —

昨今、医療の均質化を求めてEBMやガイドラインが闊歩しています。「エビデンス」と呼ばれる情報は医師でなくても簡単に入手することができるデジタル時代です。神経内科医である小生が血液内科の最新知識を得て、見様見真似で実践することも難しくありません。しかるに近い将来、私たちの仕事は人工知能に取って代わられるのではないかという主張もあります。否、もしそのような時代が来るとしたら、それは私たち自らが、血の通った生身の患者を見失い、そこに寄り添い、答えのない問いに向き合っていく勇敢さを忘却した時でしょう。

次の百年に向けて、諸先輩方から受け継いだ「内科学」を、今を生きる私たちが連綿と紡ぎ育て、その先の未来へと引き継ぐことをここに宣誓し、百周年の節目を祝いたいと思います。内科学教室よ、永遠なれ。

2003年 慶應義塾大学医学部卒業（82回）
2003年 慶應義塾大学病院内科研修医・慶應義塾大学COE研究員（生命科学）
2004年 日本学術振興会特別研究員（DC1）
2007年 慶應義塾大学大学院医学研究科修了・日本学術振興会特別研究会（PD）
2008年 慶應義塾大学特任講師（医学部総合医科学研究センター）
2013年 慶應義塾大学助教（医学部内科学（神経））
2018年 慶應義塾大学教授（医学部内科学（神経））（現職）
2018年 慶應義塾大学グローバルリサーチインスティテュート副所長（兼務）
2020年 慶應義塾大学病院脳卒中センター長（兼務）
2022年 金沢大学客員教授（兼務）